

月例研究発表要旨

第 215 回 2003 年 11 月 26 日
「ミュンヘンとドイツ
——イメージと文化」

尾方一郎

2002 年 3 月から、2003 年 3 月にかけて、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学（ミュンヘン大学）ドイツ語ドイツ文学科を受け入れ先として滞在した際の報告である。

ドイツについて一般に抱かれているイメージといえば、一方では質実剛健で律儀なドイツ人と、彼らが築いてきた重厚であったりロマンティックであったりする文化であり、他方では工業を中心とした科学技術の先進性と、それに伴うエコロジー的な心性やキッチュな点を多々含む文化であろうと思われる。

こうしたイメージは、もちろん一定範囲で妥当するものであるが、異文化に対する表象というものがしばしばそうであるように、ある程度偏差が強調されるところもあり、またいわゆる「グローバル化」の影響もあって、少なくとも日常生活で目にする範囲では、実際には日本などとそれほど違わないように平準化されてきているようでもある。その一方で、情報化に伴って異文化に関するイメージというのはますます視覚的なイメージで捉えられるようになっていられると思われるが、それを意識した上で発揮されている視覚的な形で現れた「ドイツ」の独自性というものが、単純に伝統などで説明されるものでもなく、現代的な意

識からの再構築であるようなものも数多く見られることに気づかされる。こうした平準化とそれに並行するドイツ的イメージの再構築は、報告者が初めてドイツを訪れた 1980 年代に比較しても、相当に進行しているように思われた。

こうした観察について、約 50 枚のスライドを使用し、その画像に基づいて報告を行った。紙上では画像を用いることができないので詳細な内容については省略する。

第 216 回 2003 年 12 月 17 日
「世界華文文学について」

松永正義

報告は華文文学というものの紹介を主眼としたので、論旨と言えるほどの創見をふくむものではなかったが、大体以下のようなことを話した。

1. 華語、華文とは、中国語という意味だが、大陸でも、台湾でも普通に中国語を言うには中文あるいは漢語という語を用い、もしくは普通話、国語という語を用いる。前者は言語そのものを言う場合であり、後者はその言語が近代において標準化されたものをさして言う。華語、華文という語は、大陸でも台湾でも、外国人に対して中国語を教える場合に、その中国語を言うための語として使われる。また海外の華人社会で中国語のことを華語、華文と称する。

日本では荻生徂徠のころから、漢文読みではなく、近世の中国語によって中国の書を読むことが盛んになっていったが、そう

したなかで近世の口語を華語と呼ぶことが始まったと考えられる。明治時代以降も、近代の中国語の口語すなわち官話（あるいは国語）を、支那語、または華語と呼んだ。

華語、華文ということばは、中国の外にあって中国語の口語を言う語であると考えられる。

2. 華文文学とは中国語で書かれた文学の意味だが、大陸すなわち中国本部で書かれた文学は、それだけに注目して言う場合には中国文学と呼べばいいわけで、これを華文文学と呼ぶ場合は、大陸の外にあって中国語で書かれた文学のなかに位置づけてみる場合だと考えていい。大陸の外にあって中国語で書かれた文学にはおよそ3つの類型がある。ひとつは台湾、香港で書かれたもので、70年代以降これらの地域で書かれた文学は、大陸のそれとは異った独自のものとして認められるようになってきた。もうひとつはマレーシア、シンガポールを初めとする東南アジア地域の華人によって書かれたもので、20年代以降こうした文学が形成され、独自の特徴を持つようになってきている。3つめはアメリカをはじめとする世界各地の華僑、華人によるものである。2つめと3つめのものは同じようなものとも考えられるかもしれないが、華僑、華人のありかたや、大陸との関係において、質的に異なったものがあると思われる。

3. 台湾では日本の植民地時代から徐々に大陸のそれとは異なる独自性を持った文学が形成されてきたが、とりわけ70年代の民主化運動のなかで、大陸とは異なった課題が強く意識され、またそれとともに文学の大陸とは異なった独自性が主張されるようになった。香港でも70年代頃から大陸とも台湾とも異なった地域の独自性が意

識されはじめ、これにともなって80年代ころから香港文学の独自性が意識されるようになってきた。

4. 一般に中国国籍を持ったまま海外に居住するものを華僑、現地国籍を持ったものを華人と称するが、東南アジアの各地域では、大戦後の独立にともない、華人社会のなかで華僑から華人への転換が行われた。落葉帰根から落地生根へとと言われる転換である。大戦前の華人社会は大陸からの不断の移民によって流動性の高い社会であったと考えられるが、戦後は独立した国家のなかで華人系の住民として生きることを選ぶことになったわけで、その文学もまたそれぞれの地域の独自の課題と取り組むようになっていった。

たとえばマレーシア、シンガポールでは、1920年代から大陸の影響下に中国語による新文学が書かれるようになり、これを馬華文学と言うが、大戦前まではこの「華」は「華僑」の「華」だが、戦後は「華文」の「華」を意味するようになった。これもまた文学の土着意識の現れと言える。

5. アメリカの華僑、華人社会は、東南アジアの諸地域と比べて流動性が高く、土着化、あるいは本土化という点で、他の二者と比べてやや異なる点があるものと思われる。華文文学を取りまく環境が英語という強大な言語であることも重要だ。したがってアメリカの華文文学は一方で中国へ回帰しようとする方向と、他方英語による創作とのふたつの方向に挟撃される位置にある。

6. こうして大陸のそれとは異なった中国語の文学が各地に形成されてきたわけだが、こうした文学を「世界華文文学」と総称することは、80年代に始まったことである。80年代には大陸でも、台湾でもこうし

た華文文学を研究する国際会議が定期的に組織され、現在に至っている。これらの会議はいずれも華僑、華人を引きつける政治的意図をはらむもので、全体としての基調は中国との文化的一体性を強調する方向にある。

これに対してヘルムート・マーティン、劉銘銘、王潤華らの組織した華文文学大同世界国際会議(86年ドイツ, 89年シンガポール)は、台湾文学やマレーシア・シンガポール文学の独自性を強調する方向にあり、上記のものとは異なった方向を持つものだった。

7. 華文文学そのものは早く20年代から作られてきたものだが、それらが80年代以降華文文学として改めてとらえ返されるようになったのは、大陸とは異なった独自性が意識され、その問題の独自性がまた大陸の文学に刺激を与えるといった相互関係が形成されてきたからだろう。これらの文学は中国語による文学の世界を多様で多元的なものについていく可能性を持つものだと思う。

第217回 2004年2月19日

「英語を読む」

瀧澤正彦

英語に限らず、母語以外の言葉を勉強するもの皆がおそらくは経験する言葉の「難しさ」に関して、「生活感覚」「語義」および、私が「流動的シンタックス」と名づけているものの三つのレベルについて報告します。

私はアグネス・チャンの歌で知ったのですが、Joni Mitchell (1943~) の書いた詞

に、

Words like, when we're older, must
appease him

And promise of someday make his
dreams. ('Circle Game,' ll. 13-14)

と言う一節がある。文中の'him,' 'his'は'child'を受けているので、フェミニズムから問題にされうる歌詞であるが、それ以前に、始め私は文章の構造が理解できなかった。詞の語り手(歌い手)は、子供時代の自分に自己投影しているので、'we'と'him'とは重なりあっています。どうやら、子供のころ、いろいろなしたいこと、欲しいものがあっても、「大きくなったらね」と言うような「約束」で親たちはその場逃れをするのだが、子供はその言葉をその場では信じて夢を膨らませ、その「いつか」を待つのだが、結局いつの間にか忘れられて、夢は夢のまま消えていって、いつしか大人になると言うのが詩の内容らしい。こういう文章は、'when you're older'と言う言葉に滲み込んだ英語の生活感覚に慣れ親しんでいないと、英文の文法構造まで分からなくなるという例です。しかし、そういう英語の息遣いを知るのはなかなか大変です。

現在翻訳中の文章に、次のような一節があります。

(He) had dropped the shilling in my
glass and whisked me off on a...trip
to a seminary near Oxford. (Terry
Eagleton, *The Gatekeeper*, p. 42)

「コップにシリング硬貨を落として、セミナーに連れて行った」と言うことらしいが、コップにシリング硬貨を落とす意味が分からなかった。実は、'take the king's shilling'と言うイディオムがあって、「兵役に応募する」と言う意味はほとんどの英

和辞書にも載っています。このイディオムの歴史的由来は *OED* に載っています。気をつけて調べてみますと、*Brewer's Dic. of Phrase and Fable* にも載っていました。しかし、'drop,' 'glass' と関連した意味を探していて途方にくれていたのですが、ダヴェンポートさんから教えていただいてようやく意味が分かりました。古くから、兵役に応募すると王様から一シリング下賜される習慣があったのですが、ナポレオン戦争ごろになるとなかなか兵隊が集まらず、この習慣を逆手に使って、徴募官がパブなどに出かけて行って、失業者や貧乏人のビールのグラスの中に一シリング硬貨を落とす。これを相手が急いでつまみ出さないと、王様のシリングを受け取ったものとみなし、連行して兵隊にしてしまったらしい。そういう話が裏にあって、「ぼんやりしていた私をリクルートして、セミナーに連れて行った」と言う意味になるらしい。こういうことに気づくには、半端なイギリス史の知識ではだめで、生活の中のイギリス史を勉強する必要があります。

次に、私が気がかりになっている単語を幾つか紹介します。最初は 'good' に関して。どうも日本語の「良い」と内容が違う気がします。「良い子」について述べた詩を紹介します。

You must still be bright and quiet,
And content with simple diet. (R. L.
Stevenson, 'Good and Bad Children,'
in *A Child's Garden of Verse*)

日常的にわれわれが日本語で言う「好き嫌いしない、元気な児」とはずれていて、どうやら「粗食に甘んじる静かな児」が「良い子」らしい。「粗食」と言うところはいかにもイギリス的ですが、これは量ではなく

質に関するらしい。逆に、'good meal' とする場合のように 'good' は質ではなくて量と言う場合がある。これは辞書的な意味の違いではなく、生活習慣なり価値観の違いであるとも考えられますが、言葉は生活と密着しているのですから、なにが 'good' であるかを知ることは、やはり言葉の勉強に不可欠なはずです。

気がかりな語の中に 'violence' もあります。普通「暴力」と訳されていますが、日本語の「暴」の意味は薄く、むしろ「(激しい) (物理的生理的) 力」ではないかと思えます。たとえば 'violent love' は、激しく愛し合っているのであって「強姦」ではない。これはドイツ語の 'Gewalt' についても言える。これに「暴力」と言う言葉を当てはめて、

「一般に暴力が原理として倫理的であるかどうか。」(ベンヤミン『暴力批判論』野村修編訳、岩波文庫、30 ページ) としますと、一般読者を戸惑わせます。普通は「倫理的でない力」を「暴力」と言うのですから。ですから、マルクス主義の「暴力革命」論も、「大きな抗しがたい歴史的な変革の力が社会を土台から作り変える」と読み替えられなければならないのではないか。

他に 'true' も気がかりになっている単語の一つです。たとえば、有名な

Beauty is truth, truth beauty. (J.
Keats, 'Ode on a Grecian Urn,' l. 49)

も、「美は真実である」と日本語にしてみても、中身が良く分からないからです。人間の精神を離れた「真実」と言う無機的な意味ではなく、人の心に触れるいまま少しふくらみのある言葉ではないか。ドイツ語学者は同属の 'Treue' に「まごころ」と言う美

しい訳語を当てています。そうすると少し分かる気がします。

Ah, love, let us be true/To one another!
(Matthew Arnold, 'Dover Beach,' ll. 29-30)

信頼すべきものが見えない混乱した世の中で、「愛する人よ、せめて君と僕とは互いに誠実であろう」と言うことでしょうか。先のキーツの詩も、「美はまごころである」と読んだとき、その内容が我われの心の琴線に触れてきます。

最後にふくよかな「文脈」の取り方についての雑感に触れます。ミルトン研究者のリックス (Christopher Ricks) は、ミルトンの文体を 'Grand Style' と呼び、文法構造を超えて話しかけてくる文体の説明に 'liquid texture' という用語を使っています。リックスの挙げている例では、

from her husband's hand her hand/
Soft she withdrew. (*Paradise Lost*, ix, 385-86)

の 'soft' は形容詞ですから、文法的には 'her hand' を修飾するのですが、文章の流れからは「そっと (手を離れた)」のように、副詞的な働きもしていると言うのです。

Her hand soft touching, (Adam)
whispered (to Eve)... (*ibid.*, v, 17)

の 'soft' も同じです。

文脈は少し違いますが、たとえば、

those who, after long/And weary expectation, have been blest/
With sudden happiness. (Wordsworth, 'Nutting,' ll. 27-29)

の 'after long and weary expectation' は、おそらく '(having been) weary after (= from) long expectation' のことでしょうか。

もう時間がありませんので、途中を省略して一挙に結論を申し上げますと、こういう 'liquid texture' をさらに推し進める読みの可能性がないかと言うことです。私はそれを 'liquid syntax' と名づけています。たとえば、

Discord.../...among th'irrational/
Death introduced. (*Paradise Lost*, x, 707-09)

'th'irrational' は「非理性的なるもの (人間以外の動物)」で、アダムとエヴァの原罪がまずは動物世界に「死」を招き入れたということですが、歳をとって死が見え始めてきますと「人間理性には説明がつかない死」が気がかりになってきます。文法的にはありえない 'irrational death' という連続音が、響いてくるのです。そもそも人間の罪がなぜ他の理性を持たない動物に「まず」死をもたらしたのか、それは「死」が「非理性的」であるからだという声が聞こえてくるのです。読み込みすぎだという声のあるのは承知の上で、文法を液化する読み方があるのではないかと提案してみたいのです。たとえば、

泣いてあなたの背中に投げた、憎みきれない雪の玉。(吉岡治「細雪」1~2行)

の「憎みきれない」は超文法的に「雪の玉」ではなく「あなた」を修飾している。芭蕉の有名な句「古池や蛙飛びこむ水の音」が「古池に蛙飛びこむ」でないのは「発句」の「切れ」の必要からと言われるが(浅沼璞『「超」連句入門』16ページ)、われわれが戸惑うことなくこの句を受け入れられることは、「liquid syntax」を生み出す言語機能の豊穡さを示していないだろうか。